

## 四ツ葉生 校外活動でも大活躍！

### ◇第54回国際化学オリンピック中国大会<金メダル>獲得

すでに新聞各紙で報道されましたが、6年生柏井史哉さんが日本代表として標記大会（7/10～18）に出場し（本県初）、見事に金メダルを獲得しました。柏井さんら代表4人は3千人以上の受験者から選出され、7月13日に都内の会場で筆記試験に臨みました（オンライン開催、各国から300人以上が参加）。受賞後は、伊勢崎市役所に表敬訪問し、8月にはエフエム群馬



文部科学大臣より表彰状受領

「POTLUCK」に出演、9月には文部科学省・経済産業省にも表敬訪問を行いました（上写真、文部科学省提供）。また、11月12日には群馬県庁32Fで行われる「始動人 FUTURE SESSION」に出演し、山本群馬県知事との対談も予定されています。今後のさらなる活躍が大いに期待されます。



### ◇第44回少年の主張群馬県大会<優秀賞>受賞

第8号でもお伝えしたとおり、中部地区から9月実施の「少年の主張群馬県大会」（※少年が、日ごろの生活をとおして感じていることや考えていることを発表することにより、社会の一員としての自覚を高めるとともに、少年に対して県民の方が理解や認識を深め、青少年健全育成活動の一助とし、併せて「少年の日」の普及を図ることを目的に実施しています）に推薦された3年生丹治心さんが、動画発表・審査の結果、見事に優秀賞を受賞しました（全16名参加、うち最優秀賞1名、優秀賞4名、努力賞11名）。本紙裏面に発表作品（題目「特権ではなく平等を」）を掲載しますので、ご一読ください。なお、全参加者の審査結果・発表作品は群馬県Webページに掲載されています（<https://www.pref.gunma.jp>）。



動画発表の様子

### ◇第23回群馬県中学校英語弁論大会でも好成績

9月8日に令和4年度伊勢崎市・佐波郡英語弁論大会がいせさき餅の郷・円形交流館で開催され、一般の部で3生根岸美結さん（タイトル「The Mind Projector」）、海外在住経験者の部で3年生ウィザロウ・ソフィさん（タイトル「The Joy Club」）がともに1位となりました。2人は9月27日に群馬県青少年会館で開催された第23回群馬県中学校英語弁論大会（兼高円宮杯第74回全日本中学校英語弁論大会群馬県大会）に出場し、ビデオ審査の結果、根岸さんが一般の部で特別賞、ウィザロウさんが海外在住経験者の部で2位を獲得しました。前期課程においても、本校のグローバル教育の成果がしっかりと表れています。

## 寄付のご紹介

赤堀緑地（株）の小保方克治様より、昨年度に引き続き、横断幕1張（写真左）を寄付していただきました。小保方様は、第2代PTA会長であり、四ツ葉学園のさらなる発展のために、寄付を申し出てくださいました。横断幕は、西グラウンド西側のフェンスに張ってあります。また、本校関係者の株式会社二幸様よりテント1張（写真右）を寄付していただきました。このテントは9月に実施された体育祭にて早速使用させていただきました。誠にありがとうございました。



このテントは9月に実施された体育祭にて早速使用させていただきました。誠にありがとうございました。

特権ではなく平等を

群馬県 伊勢崎市立四ツ葉学園中等教育学校

三年 丹治 心

中学三年生、十五歳。人生の中で一番キラキラとした時間。それは二文字で「青春」と呼ばれます。勉強や部活、そして恋愛に明け暮れる日々。それが「青春」という言葉の定義なら、私は青春のすべてを味わうことはできません。

小さい頃、自分が何者なのか悩んでいた時期がありました。「男」「女」という考え方が自分には当てはまらない。友達が好きなの話をしてるときは、なんとなく話を合わせる。なんで、私は他の子と違うのだろう。そう何度も疑問に思っていました。

小学四年生の夏、母と一緒に東京へ行った時のことです。代々木公園の近くの車道を沢山の人が歩いているのを見ました。私が偶然見かけたのは「二〇一八年東京レインボー・プライド」。性的マイノリティを含めたすべての人が、「自分の自分らしい生き方」を訴えるパレードでした。あの時の驚きと感動は四年たった今でも、忘れることはできません。

それから家に帰り、性的マイノリティについて調べました。LGBTQといった今まで見たことがなかった文字がそこには沢山載っていました。その時、自分の性を診断するテストの結果として出てきたのが「×ジェンダー」。さらに私は他人に対して恋愛感情を抱くことがないアセクシユアルにも当てはまらず。今まで、「男性か女性、二種類の選択肢しか存在しない」そう思っていた私にとって「男性と女性が混在する」という考え方は初めてでした。そして、自分が×ジェンダーだと知ったことで、不思議とそれまで抱え込んでいた心の霧が少し晴れた気がしたのです。

しかし、私は自分が×ジェンダーであるということを誰にも伝えることはできませんでした。私がカミングアウトすることで、周りにいる大切な人が離れていってしまうことが怖かったのです。それでも、一緒に過ごしてきた人達を信じ、カミングアウトしました。その後、みんなの対応が変わることはありませんでした。そしてあるとき、ある友人が私にこう、声をかけてくれました。

「私は丹治が『丹治心』っていう友達として大好きだから。」その友人は、今でも、私のことを一人の友達として何の偏見も持たず、接してくれています。私は、何より「特別扱いをされなかった」ということが本当に嬉しかったのです。

私の住む世界では男女の区別なく、皆、平等に生活していると感じています。では、大人の世界はどうでしょうか。現在、世界は「性的マイノリティを認めよう」という風潮に変化しています。日本もその一例です。しかし、そのゴールは本当の「平等」ではないと思います。「認める」という言葉は、上下関係のニュアンスを含んでいるようにも感じられるからです。「認める」という意識なく、お互いを受け入れ合うことが、本当の「平等」だと私は思うのです。

現在、性的マイノリティに当てはまる人は十一人に一人、左利きと同じくらいの確率で今を生きています。あなた自身が「性的マイノリティは特別な存在ではない」と知ること、その人らしく生きていける、真の「平等」な世界が、自然とできていくのです。この主張が、「性別」という窮屈な箱を壊す、きっかけになることを願います。

恋愛がなくても、私はありのままでもいられる今の生活が大好きです。私にとつての青春を、今、謳歌しているのです。だからこそ、私は伝えたい。「許可」ではなく「受容」を。「特権」ではなく「平等」を。